

2011年9月4日

大阪インターナショナルチャーチ

キャミ・アレギザンダー姉妹

聖書箇所（新改訳）：マタイ 5:16

タイトル:神のご臨在と神のお働き

1月に、日曜礼拝のメッセージで2011年の抱負について、ピリピ3章7-11節からお話しました。

その際、強調したのは、私の目指すところはキリストを知ること、中でも、「キリストの苦しみにあずかること」でした。キリストとその御心を知ることができたなら。試練であれ、弱さであれ、苦しみであれ、私が置かれた状況についてキリストの視点で見ることができたなら、と思います。そうすれば、信仰において前進できるように思えるのです。そのつぎの12-14節にパウロが「追求している」と書いているとおりです。

さて、今年になって9ヶ月目に入り、そろそろ自己チェックするべき時だと思います。さて、調子はどうでしょう。

未だに文句を言うくせは残っています。これは今も私の課題です。けれども、これを通して、神の御心を探るすばらしいチャンスに神が与えてくださっていると感じています。今日のメッセージでは、この経験についてお話ししたいと思います。

3月11日の震災後、キリストの苦しみを知るとはどういうことかあまり考えませんでした。ただ、苦しみについて考えていました。苦しみから逃げながら、苦しみを理解することなどできません。震災が起こった数日後、電車の中でiPodを聞いている人や、新しいショッピングモールのお話をしている人を見かけました。まるで何もなかったかのように、日常を過ごしている姿でした。神はあの震災をたいへん心にかけておられるし、ここで私たちに起こるすべてのことに、深い関心を持っておられます。一方、私たちは、見たくないものからは目を背け、他人の苦しみに心を閉ざしてしまうのです。その電車に乗っていた人たちにも、それぞれ苦しみはあるでしょう。寂しい、傷ついている、生きる意味がわからない、と。けれども、その本当の痛みから目をそらし、心の叫びをiPodの音楽でかき消し、物を買うことで満足を得ようとするのです。私も例外ではないことに気づかされました。目を覚ます必要があったのです。

私は、東北に行こうと決めました。このできごとにも動機のひとつです。他の理由としては、教師として、子どもに模範を示す責任があると思ったからです。私自身が他の人の痛み鈍感なのに、子どもたちにあわれみを教えることなどできるのでしょうか。一度目の東北行きは、「開眼と傷心の旅」とでも言うべきものでした。神はたくさんの方に私の目を開いてくださいました。石巻の隣人たちに少しでも愛を注ぎ、助けになれば、とできることをしましたが、今思い出すのは、神が私の心に注いでくださった事柄です。優先順位について。物が一番大切でないことは確かです。この二日間、シャベルですくっては麻袋に入れてきたものですから。土台について。キリスト以外の土台はすべて崩れます。希望について。私たちの生き方を特徴づけるものです。快適さだけを望む人は、この世の快適さ

のためだけに生きます。キリストのご臨在にある永遠の喜びを望む人は、この世の悲惨な状況の中でさえ、その喜びを体験します。

これが一度目の東北行きでした。キリストを知ることにおいて一歩前進です。私の目を開いてくださったキリスト・イエスを賛美します。

そして、数週間前、再び東北に行きました。OIC のグループとは行きませんでした。Be One というグループと行くほうが安いというのが主な理由です。今回の旅で大きく印象に残ったのは、神のご臨在と神のお働きです。

今日のメッセージでは、神が私に教えてくださっていることをみなさんと分かち合いたいと思います。みなさんに勇気と励ましを与えられれば、神に感謝です。退屈で、自分の信仰の歩みには関係ないものだったなら、お聞きくださったことを感謝します。

神のご臨在

このメッセージは、神が存在するかどうかについて説得するためのものではありません。私は神を信じています。神の名そのものが、ヤーウェ「存在する」です。「わたしはある。」「わたしは、『わたしはある』という者である。」今日お話ししたいのは、神の民の人生に、神のご臨在がどのようにあらわれるかということです。旧約聖書では、イスラエルの民には契約の箱がありました。美しい金の箱で、自分たちで担ぐか、幕屋や神殿の中に置かれていました。

ヘブル 9:3-4

「また、第二の垂れ幕のうしろには、至聖所と呼ばれる幕屋が設けられ、そこには金の香壇と、全面を金でおおわれた契約の箱があり、箱の中には、マナのはいった金のつぼ、芽を出したアロンの杖、契約の二つの板がありました。」

契約の箱の中には、神の備えの証、神の導きの証、そして、神の律法が入っていました。イスラエルの民にとって、契約の箱が神の臨在を象徴するものでした。契約の箱は、戦場にも運んで行かれましたし、人々はそれを担いで街中を練り歩きました。契約の箱は神殿の至聖所に保管してありました。（日本の祭りで担ぐ御神輿に少し似ていると思います。）けれども、イエスが来られたとき、何かが変わりました。イエスは神の律法を成就され、ご自分の死と復活により、ご自分のからだをいのちのパンとしてささげてくださいました。神がご自分の聖霊を送られると、私たちは内なるお方から導きを得るようになります。神の律法を担いでまわる必要はなくなったのです。私たちの心に刻まれるからです。神のご臨在が私たちの内にあるのです。神が私たちの内に住んでくださるということです。最近、使徒言行録の学びが始まりましたが、冒頭の使徒 1:8 には、このようにあります。

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

コリント第二 4:10 はこう言っています。

「いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。」

神が私たちの内に住んでおられるのですから、私たちはイエスを携えています。クリスチャンとして、キリストの名を保持しています。私たちは教会として、キリストのからだです。私たちは小さな契約の箱であり、歩く神殿なのです。

コリント第二 2:14-15 はこう語ります。

「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。」

私たちはキリストのかおりなのです。私たちが行くところはどこでも、キリストのかおりがするはずです。

私の大好きなある生徒の話です。とてもおもしろい子です。ある日、彼は同学年の一番恥ずかしがりの女の子の隣に立っていました。二人ともドッジボールでアウトになり、また中に入れるのを待っているところでした。すると突然、男の子が女の子のほうに体を傾け、くんくんとおいを嗅いだのです。そして私のほうに向いて、「キャミ先生、この子いいにおいだよ！」と言いました。男の子は褒めるつもりだったのでしょうが、その女の子はとてもびっくりしていたので、男の子ににおいを嗅がれたら女の子は嫌がるわよ、と教えてあげました。

誰かが私たちのにおいをくんくんと嗅いだら、キリストのかおりがするでしょうか。人々は、「この人、いいにおいだ！」と言うのでしょうか。

コリント第二 5:20 はこう語ります。

「こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。」

もちろん、神はすべての場所で働いておられます。神は、遍在のお方です。どこにもおられるという意味です。神に限界はありませんが、私たちの内に住むことを選んでくださいました。私たちが神殿です。自力では到底きよくなれない私たちの心が、神のご臨在の住まわれる至聖所となるのです。このことを考えてみましょう。クリスチャンである私たちは、どこに行くにもイエスもそこに行かれます。私たちは、キリストのご臨在とかおりをどこに連れて行っているのでしょうか。職場、学校、友だちの家、バー、銀行、レストラン、電車、お店、OIC、道路、駐車場。どこにいても、私たちはキリストの代理です。キリストを携えています。キリストのかおりを放っています。

キリストは陰気なお方でしょうか。私たちはぶつぶつ文句を言っていないか。

キリストは良いかおりでしょうか。キリストは良いお方に見えるでしょうか。

教会の中でも外でも、キリストとその愛が私たちの内に生きておられるのが見えるように、人に仕えているのでしょうか。もう一度、繰り返します。キリストとその愛は私たちの内に息づいているのでしょうか。キリストを良く見せよう、良いかおりをさせよう、明るく見せようとして私たちが努力する姿ではありません。キリストご自身が、私たちの心に光を当て、

キリストご自身が良く見えて、良いかおりを放っておられるか、ということです。人からどう見えるかよりも、自己評価が大事だと思います。

キリストがどのようなかおりか、例を挙げてお話ししましょう。

一度目の東北への旅では、吐き気と戦いながら、腐ってうじのわいた魚の山をシャベルでかきました。周辺には腐敗臭が漂っていました。公園の清掃を終えて、グループは地元住民のためにバーベキューをしました。私たちが3日間も公園で作業していたのを知っていた人たちは、バーベキューの鉄板が出てきたので、何が起こるのかと好奇心で見に来たようでした。私たちがその地域にいたことは誰もが知っていました。一軒一軒まわって近所の人たちを招いたり、メガホンでお知らせしたりもしたので、それで来たという人たちもいました。その地域に私たちのメッセージを携えていったのです。けれども、多くの人たちは、においに誘われてやってきました。バーベキューのおいしいにおいに引き寄せられ、傾いた家からみんなのいる場所へと出てきたのです。それこそが、キリストのかおりとしてわたしたちのあるべき姿です。腐った魚の中で香り立つ、バーベキューチキンのかおりです。神はどこにでもおられ、どこででも働いておられます。私たちのうちにもいてくださいます。また、私たちをとおして働いてくださいます。多くの場合、私たちのすべきことは、ただ出かけて行って他の人のところにキリストを携えていき、キリストの愛にあふれていただくことです。そして、人を惹きつけるキリストのかおりとなり、キリストとの交わりへと人々の興味をを引くことです。もうひとつのお話を分かち合いたいと思います。鈴木さんという年配の女性のお話です。この方は、私たちが現地でお会いした女性ですが、津波でご家族を何人か亡くされ、自宅の二階部分で娘さんとお孫さんと暮らしておられます。鈴木さんの家で作業をしたとき、彼女が昼食を用意してくださいました。昼食後、鈴木さんはこうおっしゃいました。「あなたたちがしてくれたことは本当にすごいですよ。周りを見てください。あなたたちが来てくれたおかげで、みんなの顔が明るくなりましたよ。」

私たちは、「いいえ、私たちではないのですよ」と答えました。

彼女はこう続けました。「あなたたちがしてくれたことは本当に素晴らしい。津波の後、ここには電気も、ガスも、暖房も、水もなかったんです。お向かいの家には井戸がありますが、がれきの中から見つかったのはプラスチックのコップだけで、それしか水を入れる物がなかったんです。2-3日したら、きっとお役所の人たちが水や食料を持ってきてくれるだろうと思っていました。でも3日経ってもまったく助けが来ませんでした。ここには自分でなかなか動けないお年寄りも多いですから、もう少しがんばって待ってみようと思いました。4-5日かかるかもしれないし、とにかく5日間がんばろうと。それでも誰も来ません。それで、元気な者が避難所まで歩いて行って、食べ物をもろう列に並びました。けれども、配給の規則は、一人につきおにぎり一個とボトルの水一本でした。行ってくれた人たちは帰ってきて、ひとつのおにぎりを4-5人でわけて食べたのです。本当に飢え死にしそうでした。そのとき、あなたたちが来てくれたんですよ。私は近所中を「神様だよ、神様が来てくださったよ。見捨てられたと思ったけど、神様が来てくださったよ」と言ってまわりました。あなたたちは食べ物と新鮮な果物と水を持ってきてくれました。それで、

また来ると約束してくださったでしょう。でも、みんなに期待させてはいけないと思って、それは秘密にしておいたんですよ。あなたたちがそう言ったときには誰にも言わなかったんです。そして、あなたたちが電話をくれて、また行ってもいいですか、と言ってくれたとき、また近所中をまわって、「神様は約束を守ってくれるお方だ」と言ったんです。」鈴木さんがこの話をしてくれたとき、私たちの目には涙が浮かんでいました。私は、彼女にいっしょにお祈りしてもよいですかと尋ねました。彼女は大声で家族を呼びました。私たちは、鈴木さんとご家族が喜びに満たされるように、また祝福されて、神の希望で満たされるように、と祈りしました。驚くべきことは、そこで本当に働かれているのが誰かということ鈴木さんが知っていたことです。彼女は、「Be One が来てくれた」とか「Be One は約束を守ってくれる」とは言いませんでした。神が来てくださったのです。神が約束を守られるお方です。そして、神は働いておられるのです。

神のお働き

神のお働きは、神の民の人生の中にどのように見えるでしょうか。

ヨハネ 5:17 でイエスはこう言われました。

「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。」私たちはキリストのからだです。また、キリストの使者です。ですから、イエスの例に倣うべきです。私たちも働いているべきです。けれども、私たちではなく、私たちの内におられるキリストが永遠の価値を持つことを成し遂げてくださるのです。ピリピ 2:13 にはこうあります。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」

マタイ 5:14-16

あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

エペソ 2:10 はこう語ります。

「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」

エペソ 4:11-13、16 はこう言っています。

「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致

と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。…キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」

神は私たちにすべき働きを与えてくださっています。それは、救いを得るためではありません。むしろ、神が深い愛を持っておられるからこそ、私たちに働きを与えておられるのです。ともに働き、お互いを立て上げるうちに、キリストの満ち満ちた姿を見ることができるようになります。そして、信仰の一致に達します。そして、成長し成熟します。キリストをもっと知るようになるのです。では、どうやってお互いを立て上げるのでしょうか。答えはそこに書いてあります。見つけられましたか。漢字一文字です。福音と神のお働きはこの一言に集約されます。愛です。

神を暑く愛するようになれば、人に対するあわれみも深くなります。人々に愛を注ぐなら、その人たちはイエスを見ることができるようでしょう。その愛には働きが伴うことがあります。それは溝を掘ることかもしれません。子どもと遊ぶことや人を赦すことかもしれません。他にも、誰かのお世話をするために自分の生活パターンを変える、口論で言葉を控える、など方法はたくさんあります。けれども、それが何であれ、そのことをとおして、私たちの心の中にキリストが生きておられることを人々が知るようになります。そうすれば、神が称えられるのです。

働いておられる神について、もう少しお話ししましょう。神は、今日のこの時も働いておられます。そして、そのお働きに神の民を用いておられます。一度目の旅で、避難所の責任者である年配の男性にお会いしました。その男性は、私たちが公園で清掃作業していたとき、それに参加されました。彼は、私たちのグループが、その地域の他のボランティア・グループと「何か違う」と感じられたそうです。二度目の旅で、たくさんの人が「青木さんのお話聞いた？青木さん知ってる？青木さんのお話ぜひ聞いてね」と言ってきました。それで、青木さんという年配の男性に会って、お話を聞きました。すると彼はこう言いました。「私はイエス様を見た。夢でイエス様が出てきた。」その続きはこうです。夢でイエスが青木さんのところにやってきて、「あなたを愛している。あなたを誇りに思っている。わたしはあなたのために計画を持っている。あなたが先日会ったボランティアを探して会いにいきなさい。彼らは私のことを教えてくれるから。あなたは私のことを学びなさい。」と言われたというのです。

翌日、青木さんは目覚めて、**Be One** のリーダー二人の名前を思い出したそうです。「ベスとチャドだ」そして、二人を見つけ、イエスについて教えてほしいとお願いしました。今では石巻に家の教会が始まり、青木さんは二人の友人をつれてこられます。そして、生けるイエスについてともに学んでおられます。彼の好きな賛美は「驚くばかりの」です。彼は言います。「日本語より英語の方がいいね。本当にアメージングだ。」何度か彼に頼まれて歌ったことがあります。私が歌い終わった後も、かれはハミングしたりします。

みなさん、これは本当に心躍ることです。今私たちは使徒言行録と聖霊降臨について学んでいます。これは、ヨエル書からの引用です。「その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、年寄りも夢を見、若い男は幻を見る。その日、わたしは、しもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。」（ヨエル 2：28-29）

青木さんのお話は、神が今も働いておられることを私に見せてくれました。神は今もその霊を人々に注いでくださっています。中東でも同じようなことが起こっています。福音を聞いたことのないイスラム教徒がイエスの幻を見て、キリストに人生を捧げるといったことが起こっています。

ここで、私がつまづき疑問は、なぜイエスは青木さんにご自身で自分のことを語られなかったかということです。なぜだろうと思います。青木さんは福音を聞いたことがありませんでしたが、生けるイエスに会いました。なぜイエスはご自身で自分について教えられなかったのでしょうか。イエスは、青木さんに、クリスチャンの奉仕者を見つけて、イエスについて教えてもらうようにと言われました。神は働いておられるとともに、私たちに働きを与えておられます。神は人の目をイエスに向ける働きをしてくださいます。私たちは隣人を愛するという目に見えることをします。そして、神がそれをまとめあげてくださいます。その結果、私たちは神を称えます。

青木さんの話を聞いて、東北から帰ってきてすぐの時、私は青木さんがうらやましいと思いました。私もイエスの顔を見たいからです。イエス様はどんな顔だった、とみんな青木さんに尋ねました。彼は、「きちんとした身なりで、若くて、強そうで、漁師みたいな体格だった。顔を見れば誰でも友だちになりたいと思うような感じで、やさしそうだった」と言います。

石巻から戻って初めての日曜日、ダン牧師のメッセージはトマスについてでした。私にはそのメッセージが必要でした。見ないで信じる者は幸いです。そうは言っても、イエスにお会いしたいです。それ以上に、イエスを抱きしめたいです。けれども、人に仕えれば仕えるほど、兄弟姉妹のうちにイエスを見ることができるということを学ばされています。そして、町中の人たちの顔にイエスを見るのです。そして、生けるイエスを私たちの内に見出すのです。それなら、みなさんをハグすることは、イエスをハグすることなのかもしれません。

マタイ 25:31-45 は、羊とやぎのたとえ話です。ともに読みましょう。

「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたし

をたずねてくれたからです。』すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。』そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渴き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにしなかったのです。』

はじめに申し上げたように、私はこうあってほしいと思う自分には到達していません。私は追及していたいと思います。キリストをもっと知りたいと思います。しかし、こう思うのです。キリストを本当の意味でもっと知るようになるのは、神の民である私たちのまわりにある、そして私たちのうちにおられる神のご臨在とお働きを理解することを通してだと。キリストが私たちの内に生きておられる姿を、私たちは人々に見せます。また、互いに仕えあうことで、キリストがお互いの内に生きておられることも見ることができます。神が私に教えてくださっていることを分かち合う機会を与えてくださってありがとうございます。

祈りましょう。